

| 地域と社会をつなぐ、生徒主体のプロジェクト学習 |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| 所属・職名・氏名                | 静岡県立田方農業高等学校 教諭 櫻井 正剛 |
| 受賞分野                    | 学習指導                  |

#### 【はじめに】

農業高校の教師として、「産業教育における地域課題を学習に活かすためのプロジェクト学習」に取り組んできました。教室での授業で得た基礎学習を単なる知識で終わらせず、身近な地域課題の解決に向けた応用学習へと展開することで、生徒たちの「科学性・社会性・指導性」農業クラブ三大目標を高める学習指導を実践しました。

#### 【生徒の主体性を育む指導方針とアプローチ】

指導にあたっては、教師が一方的に知識を与えるのではなく、生徒の主体性を尊重しながらメンターやファシリテーターとして伴走することを徹底しました。学習の骨格としてPDCAサイクルを意識させ、「計画→実験→結果の考察→改善」というプロセスを生徒自身に行わせることで、仮説検証の重要性や科学的な思考力を養いました。また、より高度な技術の習得や客観的評価を得るために大学や研究所との連携を取り入れたほか、「産・学・官」の連携や地域住民への活動発表・ディスカッションの場を設けることで、社会の中で実践力を発揮できる工夫を重ねてきました。

#### 【指導が生み出した成果と探求の広がり】

こうした指導体系のもと、科学的な「基礎研究」と地域課題解決・商品開発を目指す「応用研究」を軸としたプロジェクトを展開しました。検証といった基礎研究を徹底させ、これを商品開発へと応用させました。生徒自身が科学的根拠（エビデンス）に基づいて商品化を進める楽しさと手応えを得たことで研究はさらに加速することができました。

また、酵母や乳酸菌の分離・活用という目に見えない微生物領域にまで生徒の探究心が深まりました。プレゼンテーションや地域住民・社会との関わりの中でディスカッションを行う場を設けることで、表現力と伝える力の向上を促しました。教員がPDCAサイクルの回し方を提示し、専門機関や社会とつなぐファシリテートを行ったことが、生徒の自立的な探究活動を支え、生徒たちは、成果と確かな実践力の獲得につながっています。



図 地域住民に活動発表

このように、基礎研究から応用学習への展開、大学・研究所や「産・学・官」との連携、発表・対話の機会提供といった指導が、生徒の仮説検証能力や実践力を高め、毎年の優れたプロジェクト成果と数々の受賞につながっています。

| 年間指導計画の活用と検証を通したカリキュラムマネジメントの推進 |                         |
|---------------------------------|-------------------------|
| 所属・職名・氏名                        | 静岡県立静岡北特別支援学校 教諭 長谷川 実穂 |
| 受賞分野                            | 特別支援                    |

#### 【はじめに】

私は、本校で教務主任を3年間務めています。2年目の昨年度から、年間指導計画の活用やその検証をする「年間指導計画ワーク」（以下、年計ワーク）を年3回実施し、カリキュラムマネジメントの推進に力を入れてきました。

#### 【話し合いの内容を視覚化して授業改善のヒントを探る】

年計ワークでは、児童生徒の成長の姿や課題を出し合ったり、学習のねらいや活動同士のつながりを確認したりしながら、その内容を年間指導計画（単元配列表）に書き込んで、視覚化します。視覚化することで、得た学びを他の教科等や日常の場面に生かせることに気付いたり、単元配列や学習期間の見直しをしたりし、授業改善や更なる支援の工夫につなげるきっかけにすることができました。

#### 【児童生徒を真ん中に置いた「語り合い」の大切さへの気づき】

年計ワークは、各学期末、各学年で学年主任をファシリテーターに行います。教員同士がじっくりと児童生徒や授業の話をすることは、機会を設けなければ難しい状況です。そういった中で、年間指導計画の見直しというテーマを設けての話し合いの機会は、学年経営において大変貴重です。また、児童生徒や授業について自分の思いや考えを自分の言葉で語ることが、一人一人の教員の授業へのアイデア創出や授業づくりの意欲へ、そしてそれを共有することでチームの結束力を高めることにつながりました。事後アンケートの結果から、こうした「語り合い」の大切さに気付く教員が、私の想像以上に多くいたことが分かりました。



#### 【本校ならではのカリキュラムマネジメントが実現】

年3回のうちの1回は、学校の自慢である「麻活」(\*)をテーマにしました。年計ワークを通して、麻機地域の貴重な自然や人とのかかわりを日常的に持っていること、さらには児童生徒が今後の生活で地域の人やものと関わったり、学んだりするための土台を育てる価値の高い学習活動であることを再認識することができました。（\*本校は静岡市葵区麻機地域に位置しています。全校児童生徒が、それぞれ、地域で遊ぶ、地域の自然を知る・調べる・保全活動をする、地域の人と交流する等の「麻活」に取り組んでいます。）

#### 【様々な視点からカリキュラムマネジメントを】

今後は、「教科横断的な視点」「系統性」「発展性」など、さらに様々な視点から計画を見直すために、年計ワークと教科部会とを連動させていきたいと考えています。この連動は、年間指導計画を計画に終わらせずに、活用と検証を繰り返すサイクルの軸となって学校全体でのカリキュラムマネジメントをさらに推進させていくものと考えています。

| 地域と「共創」する総合的な学習の時間 |                        |
|--------------------|------------------------|
| 所属・職名・氏名           | 伊豆の国市立菰山南小学校 教諭 宇田 実奈美 |
| 受賞分野               | 地域連携                   |

## 【はじめに】

本校では日頃より地域連携を意識した授業づくりを進めています。令和6年度・7年度と持ち上がりで担任をした子供たちに対し、多様な人との関わりを通して成長してほしいとの願いから、総合的な学習の時間を中心に地域人材の活用を進めました。本稿では2年間の実践から得られた成果と今後の展望を報告します。

## 【成果①：専門機関との連携による「生きた知識」の習得】

5年生の防災教育では、市危機管理課やチーム防災「いずのくに」の皆様から、ハザードマップの活用や防災グッズの作成など実践的な指導を受けました。また6年生の歴史学習では、市文化財課の学芸員を招き専門的な視点から講話を受けました。外部人材を積極的に活用することで、学校の中だけでは得られない、より専門的で実用的な知識を子供たちが習得することができました。

## 【成果②：「共創」のフェスティバルを通じた社会との繋がり】

6年生の総合的な学習の時間では「江川邸・反射炉フェスティバル」を企画し、きらら応援団のつながりから計12名の地域人材にご参画いただきました。観光・歴史・まちづくりの専門家の皆様に各ブースの企画運営を任せ、子供たちと一緒に来訪者へのガイドや魅力発信を行いました。事前の綿密な打ち合わせで趣旨を共有したことで学校側ではできない準備までしていただき、活動が大きく充実しました。子供たちが社会と繋がるきっかけとなっただけでなく、ゲストティーチャーの方々にとっても自身の活動を広く発信する好機となりました。

## 【課題】

この2年間で築いた地域との連携は大変有意義なものでした。今後は、年度が変わって学校側や地域側の担当者が交代した場合でも、できるだけ互いに負担なくこの取り組みを継続していける仕組みづくりが課題となります。



| 教員が笑顔で生徒を迎えるために<br>～校務の見直しと部活動の適正化がもたらす「ゆとり」の創出～ |                      |
|--------------------------------------------------|----------------------|
| 所属・職名・氏名                                         | 焼津市立豊田中学校 主幹教諭 秋山 雄生 |
| 受賞分野                                             | 学校運営                 |

### 【はじめに】

学校における働き方改革の本質は、単に勤務時間を短縮することではなく、教員に心身のゆとりを生み出し、教育活動の質を高めて子ども一人ひとりと丁寧に向き合う時間と空間を創出することにあると考えています。わたしは教務主任として校務を整理することで教員が健康かつ持続可能な形で生徒と向き合える環境づくりに注力してきました。

### 【生徒と向き合う時間を生み出す日課変更】

これまで「8:00 までに登校」としていた日課を、「8:00～8:10 に登校」という形へと変更しました。この変更の目的は、教員が余裕を持って教室で生徒を迎えられるようにすることです。これにより、生徒の登校時の表情や体調、心の変化をよりきめ細やかに把握することが可能となり、コミュニケーションの機会が増加しました。生徒にとっても、落ち着いた雰囲気の中で一日をスタートできるという好循環が生まれていました。



### 【持続可能な部活動のあり方と地域展開への対応】

休日の部活動地域展開という大きな流れの中で、本校では部活動の実施日を平日週3日から週2日へと削減しました。これは、教員の時間外在校等時間を適正化するとともに、生徒の自主的な活動や家庭での時間を尊重するための決断です。地域展開へのスムーズな連携を視野に入れつつ、教員の負担軽減と教育活動の質の維持を両立させる持続可能な体制づくりを目指しています。

### 【働き方改革がもたらした具体的な成果と今後の課題】

一連の取組の結果、令和7年度6月の平均時間外在校等時間が前年度の約64時間から約52時間へと12時間程度減少しました。また、平均時間外在校等時間が45時間以内に収まっている教員の割合も60%から70%へと向上し、教職員の間からは「出勤にゆとりが生まれた」という声が上がりました。

今後も、行事の精選やICTの更なる活用を進め、残る30%の教員の負担軽減も含めた「歩みを止めない業務改善」を継続し、生徒と向き合う環境づくりを進めていきたいと考えています。